
彼女は笑う

みかなぎあやめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は笑う

【Nコード】

N9425R

【作者名】

みかなぎあやめ

【あらすじ】

桜咲く4月、主人公笹山 碧のクラスに海外からの転校生がやってきた。

彼女の名前は猩猩緋 花蓮。

かなりの美少女でアツと言う間に彼女はクラスの中心になっていく。

だが彼女は恐ろしく変わった性格をしていた・・・

プロローグ（前書き）

この小説はある小説のための修作です。
なので更新遅めになると思います。

プロローグ以外は基本2人称で物語は進みます。

プロローグ

桜、桜。

早いとこ散ってくれ。

そんな事を思いながら笹山^{ひさやま} 碧^{あお}はそつと溜息を付いた。

彼は花粉症持ちでその花粉の種類はズバリ言って不明。ただ桜が散るところになると症状が楽になるためそう思っていた。

「グスツ、早いとこ家帰りたい」

鼻をすすると碧はまた歩き始める。

ちよつと少年」

「え？」

ふと声を掛けられ碧は立ち止まる。

「女難の相が出ているぞ」

「うわっ」

耳元でそう囁かれ思わず碧は飛び退く。

「ふふ、顔が赤いぞ少年」

そう言ったのは碧の幼馴染で変人と名高い高倉^{たかくら} 紫^{むかり}。できれば一生関わり合いになりたくないタイプの人間である。

「び、ビックリさせないでよ」

「面白いなー少年は、些細な事にもこうもちよつとした事でこうも驚くとは」

「ふつう驚きますって！」

「ははは」

そんな会話を繰り返しながら二人は歩く。

彼女と出会うことになるとは知らずに

プロローグ 彼女、現る

「はあ」

碧はそつと溜息を付き高い位置にある体育館の窓を見上げた。

碧の通う市立美景中学校は今現在、入学式の真つただ中であり、3年生である碧と紫はボケツと過ごしていた。

「次に新生代表黄金こがね 架野花かのがさんとからの挨拶です」

パチパチと疎らに聞こえる拍手の音に碧はは気を引き締め前を見る。

「えー初めまして黄金 架野花と言います。私はずっと前からこの美景中学校に入学したいと思つていまして入学できたことを大変嬉しく思います」

そつとだけ言つと架野花は壇から下がりもと居た席へと戻つていく。

「これで入学式を終わります。一年生の皆さんは退場してください」

司会の教頭（カツラを付けていると目下噂されている）がそつととぞろぞろと1年生が体育館を出ていく。

しばらくして在校生も体育館をでた。

「はいはいみなさんちゅうもーっく」

教室に入りぼんやりと親友数人と碧が話していると担任の萌葱そよぎ（26歳独身）が注目しろと言ひ黒板の前に立つ。

「転校生がいます。式の前に紹介できなかつたのは交通の事情だったから気にしないでねー。じゃ入つてきていいわよ」

そつそよぎが言いガリりとドアを開けた先にいたのは

「紹介します、こちらは猩猩ししじょうひかれん 花蓮さん、海外での生活が長くて日本の事はよくわからないらしいから優しくしてあげてね」

むちゃくちゃな美少女だった。

笹山碧の独白1 猩猩緋花蓮と言う人物が奇行を起こす前の事

猩猩緋花蓮は変人である。

僕、笹山碧がその事をわかったのは彼女が転入してから一か月後、すなわち臯月の頃だ。

そのころまでは彼女ははっきり言ってちょっと天然かな、微妙に電波かな程度のものでみんな全然平気な顔をして彼女と極々真面な関わりを持っていたが忘れもしない5月16日、彼女はついに行動を開始した。

で、あるからにして「

それは6時間目の事だった。

「うーあー」

窓側の後ろから3番目の席に座り唸る花蓮の姿は僕の座る窓側の一番後ろと言う人間観察的にはベストポジションからはっきりと見えていた。

「なんで空は碧いのにこんなところで勉強してんだろ。さっぱり意味が分からない」

そうつぶやきながら彼女は空にシャープペンシルの先を向ける。

それが始まりだった。

今思えばあの時、必死に止めていれば僕の運命ももう少しだけまじなっていてごく普通のとは行かないものの平和に一生を過ごすことが出来たのだろう。

意味が分からないと詰られたって構わない、くるってると言われても構いっこない。

だってあの瞬間僕の人生の全てが決まってしまったと言っても過言ではないのだから。

さあ、始めよう。

嘘つきだらけの物語でありながら真実だらけの物語、彼女達の推理劇と000猩猩緋花蓮の物語を

可愛らしく頬を膨らませる花蓮、今、正直言つてクラツと来た。

「まあいつか」

そう言つと彼女再び画用紙に僕の絵を描き始める。

真剣な表情で絵を描いている様はどこそこのいいところのお嬢様のように見えた。

伏せがちな長いまつげ、大きな黒真珠のような瞳、その全てが美少女と言うものに集約されている。

それが彼女、猩猩緋花蓮の外面だと僕は予測。

それをそのまま絵に反映させるため僕も画用紙に向かう。

やっぱり僕の絵つて下手の横好きだなーと思いつながら。

#

side:紫

少年が花蓮と共に絵を仲睦まじく書いているその頃私は所属している風紀委員の仕事で校外にいた。

最近この辺で首をもぎ取られた人形が廃棄されるという事件が起きており、パトロールでそれを未然に防ごうと言つ事で風紀委員でパトロールしている。

「はあ少年は今頃猩猩緋と共に絵を描いているのか」

そつと私は溜息を付くと再び路地に目を戻す。

そして私は

第2話

僕が花蓮と一緒に絵をまったりと書いていた時。

僕と花蓮はなぜか職員室に呼ばれた。

「なんで呼ばれたんだろーね」

ニコニコと笑いながら花蓮はそう言っ僕の方を見ながら口元を袖で隠す。

・・・あ、絶対笑ってるな、そう僕は心の中で呟いて前を見た。

なぜか美術部担当の物怖じしないことあかさかで有名な関西出身の赤坂

駿河先生するががだらだらと冷や汗をかき、明らかに落ち着いていない様子で下唇を噛んでいる。

（緊急事態っぽいかなあ、僕の父さんが怪我したなら花蓮は絶対に呼ばれないし。だとすると

うだうだと僕が考え事をしているうちに僕と花蓮は職員室に着いた。

かなり中が慌ただしく、まるで　　そうまるで何かとても大変

な事が起きたと言っているように僕は感じた。

「笹山、言いにくい事なんやけどな」

駿河先生がそう言っ僕の目をまっすぐ見る。

「紫ちゃんが襲われた、今病院にいるんけどな意識がまだ戻つたらんらしい。笹山、先生の車で猩猩緋と一緒に紫のおる病院に送ってやるから下校の用意して先生用の門の前で待っといてくれひんか」
気が付くと僕と花蓮は第一美術室へ廊下を走って向かっていた。

#

病院に着くと僕は真っ先に紫の病室を目指し全力で走った。

そして紫の病室のドアを開けると紫の両親が警察と話をしている真っ最中で少しだけ息を切らせて入ってきたことを少し後悔、遅れ

て花蓮が病室に入ってきた。

「あ、碧君！」

慌てたようにおばさん
け寄りそつと僕の手を握る。

紫の母親

たかくら
しおん
高倉

紫苑は僕の方へ駆

「大丈夫なの碧君？紫が怪我をして落ち着かないの？」

そう紫苑おばさんが聞いてくるが僕の答えはノー、僕は寧ろ自分の紫と言う名のテリトリーを犯されたことに対し驚いているだけだ。そうであつて僕はとても冷静だしかなり落ち着いている。そうでなければ僕と言うストレスに弱い人間はここには来ない。

・・・うん、実に理論的だ。

僕はそう心の中で思うと紫の方へと歩み寄りそのすぐ傍の椅子に座った。

そして病室にいた刑事が僕に話しかけてくる

「あのー君は確か、笹山さんとの

「あ、はいそうですか」

また、あのバカ親父か。

僕の父親は一端の刑事だ・・・一応。

一応と言うのはまあ簡単に言えば見た目が刑事に見えないからであつて落ちこぼれと言う意味ではない。寧ろ成績（？）はいい方らしい。まあ僕にとってはハッスルしすぎて早死にしないでねマイダ
ディ的な感じだ。

「なら安心ですね、担当が笹山さんなので息子関連の事件ならきつといつてもより早く解決してくれるはずです！」

はい？

今なんて言った。

この事件にあのバカ親父が関わるだつて？

そんなのヤメテ、理不尽すぎる。クソ、黙秘権を使ってやる。

「おーい碧ー」

そうこうしているうちにドアの外からバカ親父の声が聞こえてきた。

「これがクソめんどくさい事件の始まりだった。」

第3話 (前書き)

お久しぶりの更新です。なので少しおかしなことになっています。

第3話

「いやっはっは、ちよつと遅れたわ」
笑いながら我が尊バカ親父ぶべき父上、笹山ささやま空人そらとがポリポリと頭を掻く姿を見ながら僕は思わず溜息を付いた。

「遅れたって、そんなの言わないでよ父さん」

そう僕は言ってもう見慣れた親父の姿を目に焼き付ける。

すらりとした長身、さらりとして腰まで伸ばされたド派手に深紅に染めた髪、そしてかなり女性的な顔立ち、どっからどう見たって1児の父には見えない遊んでますって感じの二十歳くらいの女性って言いたくなるがこれが僕の父親だ。

あれ、なんか悲しいよ？

「あら笹山さん、笹山さんが今回の事件を担当されるんですか？」

「ええまあ人事の関係で」

あーもー面倒くさい。

兎にも角にもうちの親父が関わる事件で言うのは大抵ややこしい物ばかりで当然、『ごく普通の人間』でありたい僕は絶対に巻き込まれたりなんかしたくなかった。

「チツ」

「うわいま碧舌打ちした！」

シヨックを受けるなら受けるがいいさ、僕は別にそれで構わないし、それで充分だ。

「まあ、とにかく担当の刑事なのでよろしくね」

うん、そんなのわかってるからとつとと死んで保険金遺して。

「はい！」

ほらそのチミ、犬ころみみたいに返事しなくてよろしい。

「たしか、猩猩緋花蓮ちゃんだっけ」

花蓮ちゃんとか言うな、バカ。

「はい！同じクラスで、同じ部活何ですよ」

ウゼえ、この上なくウゼえ。なにこの甘ったるい声、虫唾がする。

「へーそうなんだ」

「そうなんですよ〜」

よし、花蓮の事は今日からウザ子と認識しておこう。

そう思った所で面会時間の終了を知らせるチャイムが鳴る。

とりあえず僕らはいったん帰路について話し合いをしてみる事に
した。

#

「うーん、なんで紫ちゃんなんだろー」

バスに揺られる中、花蓮が僕に向けて言った。

「だってさ、紫ちゃん以外にも風紀委員でいっぱいいるはずだし、
バラバラ人形だっていっぱい見つかったりして、紫ちゃんだってその
犯人を見てないわけだし変だね」

たしかに、いや、フェイクとして紫を襲って狙いは別にあるかも
ね。と僕はやや冗談めかしながら花蓮に言った。

「そうだよ、だとすると犯人は殺人を犯すんじゃない？2、3
日したら殺人が起こると思うよ、私は。あ、もしそうならこの町離
れていた方がいいね」

呑気に言う花蓮、こっちの身にもなって欲しい。

「どしたの？顔色悪いよ？」

どうやらいつの間にか僕の顔色が悪くなっていたらしい。

ま、そんなことととてもどうでもいいけど。

「じゃ、そういうことでテキストにどうか土日遊びに行こう！泊
りびー」

どつでもよくなかった。

第4話

翌日、午後3時、僕と花蓮は検査入院で異常なしと判断された紫を迎えに病院へと向かっていた。

めんどくさいけど。

僕と言う人間はそれほど人間関係を気にしない人間で、まあいろいろあった結果近くには変人の紫とそれから性格がアレな化学ヲタとウザい花蓮しかいなくなっていた。

うん、やっぱりこう言うのは大切なんだ。

自己満足の結論を僕が脳内で出した頃バスは病院に着く。

「おーい、碧っ！」

首に包帯を巻いているもののいたって元気そうな紫がこちらに向かって手を振ってくる。

ふう、ちよつとはこっちの気持ちになっくれ。心のそこから心配したんだぞこれでも。

あ、嘘はついてませんよ、僕は必要以上の嘘が嫌いなので。

「大丈夫でしたか？私心配してたんですよー」

はい、ダウト。たしか花蓮、君は事件に対してしか興味を発揮していなかったはずだ。

「すまん、要らぬ心配をかけて」

だから花蓮は一ミクロンもそんな事思っていないから。あ、やっぱりちよつとはあるのかな？紫を心配する気持ち。

「べつにだいじょーぶ！だって友達でしょ！」

あ、無いな100%。所詮、花蓮は花蓮か。

まあ、そんなことをうたうだと考えつつ僕は紫に挨拶。いやあ挨拶って大事だねえ。

「ははは、そうかそうか」

うん、紫は騙されてるな完璧。可哀そうに、目の前にいるのは嘘つきさんですよー。

僕の心の中身なんて超能力者とかそんなんじゃないと見れないと思っけから紫には関係ないか。うん、そう思おう。

「ところで電話で聞いたんだが明日から旅行だつてな。私も医師に聞いてみたらいいと言われたんだが一緒に行ってもいいか？」

ん、いつの間にか花蓮、紫の携帯番号教えてもらったんだ？

「あ、うん。いーよー」

おいおいおいおい、ちょっとまで、紫も来るだと？

やめてくれ、悪い冗談。僕の頭痛の種が増える。

嘘つき花蓮一人でも大変なのにさらに変人の紫までくるだと？

ぬははは、もー笑うしかない。

そんなこんなで始まった僕の土日、さーてどうなる事やら。

笹山碧の独白2　まあ、これからが本番なわけで

あーえー、まあこれが全ての始まりだったわけだ。うん。

これから僕と言う一人の人間と花蓮と言う名の織細せんさいすぎる嘘つきさんの物語が始まるわけだけど全部あつという間だ。

そう言う事にしておいた方が締りがいいな。

あ、それだけじゃないよ。もちろん本当の事件が始まるのはこれからでありその事はだあれも解らなかつたてのもあるからね。マジマジ。

まあ、そんなこんなで僕らは旅行へ行つて花蓮のある意味凄いと
ころを目撃して帰ってひどい目に遭つたりするところから語り始め
ようか。

そう、猟奇的すぎる事件が始まって僕らがどんな運命をた
どるかの物語を。

第5話（前書き）

また間隔があきました。

花蓮がだんだんウザくなっています。

第5話

翌朝、僕は駅前で花蓮が来るのを待っていた。

昨日帰りのバスの車中でいろいろと花蓮がくつちやべっていたようだったが睡魔に負けた僕はそんなことまったく聞いていなかったりする。

まあ、そんなわけで僕は数日分のハプニングに備え多めに持った着替えと一応トランプと某有名なカードゲーム、そしてそんなに重くない財布が入ったかばんを手に駅前にいた。

「楽しみだな」

うんと僕は言って携帯の時間を確かめる。

7時半、うん約束の時間は8時だもんね。花蓮こないや。

「少し近くのハンバーガーショップに入って適当に食べないか？」
そう紫がいつてきて僕はそれにうなづく。

待ち合わせの場所が見える位置にあるハンバーガーショップに入るところで朝食をとろうとしているらしいサラリーマンの姿やたら多く目に付いた。

僕はアイスシェイクのチョコレート味とそこそこ好きな振って味をつけるタイプのポテトのうましお味を紫はキャラメル味のアイスクリームを頼んだ。

「なあ、碧。お前は花蓮の事をどう思う？」

行き成りの紫の質問に僕は然程驚かず、少し考えてから答えた。

「別に、変な友達くらいにしか」

僕と花蓮のファーストコンタクトはかなりのものだったが関係ない話はよそづ。

兎にも角にも僕の花蓮に対するイメージは変人の一言に尽きる。

「ふうん」

やや安心したようなそれでいてどこか哀愁漂う表情で紫は言う
とアイスを一口、口にした。

齒に染みたらしく少し顔を歪めた。

#

「お二人ともおっはー！みんなのアイドル花蓮ちゃんだよっ！」
そう言うつと花蓮は手を振りながら走り寄って来る。

恥ずかしい、悶死する。誰か助けて、皆さんの目が痛いです。

「さて、お二人さん行きましょー、私の家の経営するリゾートへ
」！

へ？今なんて言った？

私の家の経営するリゾートって聞こえてけれど何で？

「へい、うちのリムジンかもーん」

花蓮が指を鳴らすとその後ろにまるで狙っていたかのごとく黒塗りの決して長くはない一般車と同じ長さのリムジンが止まる。

いや、十分にびっくりしたから。リムジンだけでもびっくりしたから。

「さて、二人とも乗ったー！楽しい旅行の始まりよ！」

はてさてどうなる事やら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9425r/>

彼女は笑う

2011年10月10日10時24分発行